

第5節 評価

1 評価の基本的な考え方

キャリア教育においても、各学校の目標及び育成する能力・態度、教育内容・方法等との関係から、児童にどのような力が身に付いたのかを明確にするために、適切な評価をすることが必要である。また、キャリア教育の評価は、各学校で適切に視点を定め、これに基づいて児童の学習をよりよく改善するために評価するものであることを確認しておかねばならない。さらに、キャリア教育に関する学習が、各教科等の学習の目標をよりよく達成し、主体的に学ぼうとする意欲の向上に結び付くと同時に、各教科等の学習がキャリア教育に関する学習の関心や意欲につながるという相互関係についても理解しておく必要がある。

キャリア教育についての学習評価を行うに当たっては、児童の学習状況の把握はもちろんのこと、PDCAサイクルの中で適切に位置付け、教育活動や各学校の指導計画の改善につなげていくことが重要である。

キャリア教育の評価の機能としては、教師が通知表や指導要録などに記載し証明するとともに、常に児童の学習状況の評価することにより学校の指導計画と自らの学習指導の改善に役立てること、さらに、児童が評価を生かして自らの学習の改善に役立てること、という二つを重視したい。

例えば、教師が児童のポートフォリオを見て、指導計画と異なった課題や活動の見通しをもっていることを把握した場合に、当初の指導計画にとらわれることなく、児童の思考や感情に寄り添い、柔軟に指導計画を修正・改善することにより、育成したい能力・態度がよりよくはぐくまれることがある。また、児童が自分のポートフォリオを見て、これまでの学習活動を振り返った場合に、他者と協同して課題を解決することなどの不十分さに気づき、それを踏まえてその後の学習活動に生かすことにより、育成したい能力・態度が確実に身に付くことがある。

2 児童の学習状況の評価

(1) 評価の視点

キャリア教育における児童の学習状況の評価は、児童が指導計画等に定めている目標について、どの程度達成しているのかを把握し、よりよく学習を進め、育成したい能力・態度が確実にはぐくまれるように学習を導くために行う。ここでは、児童の学習状況についてある一定の望まれる姿を想定し、それと実際の学習状況とを合わせて考えることにより、この学習で育成したい能力・態度が適切にはぐくまれているのかを丁寧に見取ることが必要である。また、評価の視点を適切に設定し、さらに積極的にこの視点に応じた配慮事項を設定する方法もある。その際、キャリア教育の視点から評価の視点や配慮事項を設定し、評価していくことにより、各教科等の本来の目標をよりよく豊かに達成していくことが重要になる。

例えば、第4学年社会科単元「安全なくらしとまちづくり」(p.136～137 参照)では、「いろいろな職業や生き方があることがわかる」という評価の視点から、「警察官にインタビューする際に、なぜ、この仕事に就いたのかを質問し、やりがいにも触れるようにする」という配慮事項を設定する。このことで、自分の生活を支えている人や仕事に感謝したり、あこがれをもったりしながら、「人々の安全を守る仕事をしている人々や地域の人々の工夫や努力を考えるようにする」という本単元の社会科の目標を豊かに達成していく。

このように、ここでいう評価の視点とは、各学校で設定した「児童に育成したい能力・態度」の幾つかの要素を簡潔な言葉で示したものである。キャリア教育における児童の学習状況の評価では、各学校で育成したい能力・態度の明確化を図って目標や内容を定めることから、その目標に従って評価の視点を適切に定め、確実に育成する能力・態度がはぐくまれるように配慮事項を設定することが望まれる。

(2) 評価の方法

キャリア教育における具体的な児童の学習状況の評価の方法では、以下のように、信頼される評価の方法であること、また、多様な評価の方法を適切に組み合わせたものであること、そして、学習の過程を評価する方法であることが重要である。

まず、評価の方法としては、児童の学習状況の評価する教師の適切な判断に基づいた評価として実施することが必要であり、偏った判断ではなく、おおよそどの教師も同じように判断できる評価方法や評価基準等が求められる。例えば、あらかじめ指導する教師間において授業の目標に従った評価の視点を確認しておき、これに基づいて児童の学習状況の評価することなどが考えられる。この場合には、単元において定められた評価の視点のすべてを1単位時間の授業において評価するのではなく、単元において定められた評価の視点のうち、当該時間で重点を置いて指導することとしている視点を中心に評価することが適当である。

次に、多様な評価の方法としては、児童の発表や話し合いの様子、学習や活動の状況などの観察による評価、児童のレポート、ワークシート、ノート、作文、絵などの制作物による評価、児童の学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集積したポートフォリオ、評価カードなどによる児童の自己評価や相互評価、教師や地域の人々等の記録による他者評価がある。また、複数の授業評価項目を設定し評価する評価尺度法、教師と児童の発言内容を記述する文章記述法、録音や映像による記録法などの評価の方法もある。なお、これらの多様な評価は、適切に組み合わせて評価することが考えられる。また、この際、教師間や教師と児童の間で評価に関する視点を共有していくことも考えられる。

そして、学習の過程を評価する方法としては、上記の多様な評価方法が、学習活動の事前での児童の準備状態の把握と改善、学習活動の過程での児童の状態の把握と改善、学習活動の終末での児童の状態の把握と改善という、キャリア教育の各過程に計画的に位置付けられる中で、このそれぞれの過程を通して児童の学習状況の把握を生かした適切な指導に十分役立てられるように評価することが肝要である。

また、キャリア教育では、その児童の内に個人としてははぐくまれているよい点や進歩の状況などを積極的に評価する個人内評価や、それを通して児童自身も自分のよい点や進歩の状況などに気付くようにすることも大切である。

このようなキャリア教育における児童の学習状況の評価の方法は、児童の内ある資質や能力を的確に捉え、見定め、かつ、それをよりよくはぐくむ教師の学習指導に直接的に役立つ評価の方法として常に意識することも重要である。

3 教育活動の評価と改善

(1) 教育活動の評価と改善の視点

キャリア教育における児童の学習評価は、教師にとって児童の学習状況の把握はもちろんのこ

と、学級や学校全体の学習状況を把握し、授業改善等を行う契機となるべきものである。また、学校評価の一環としても、教育活動の評価を行うことは極めて重要である。

ここでは、まず、教師の学習指導の要諦として、なによりも教師のあたたかい児童理解を基本とすることを確認しておきたい。児童一人一人の興味・関心は個別なものであり、また、体験活動などにより見出され、設定される課題も個々の児童によって異なるものが多い。さらに、活動に要する時間も課題によって異なり、そのための教材も固有なものになることが多い。これらの児童の姿は、その児童が有している、その児童なりのよさや可能性を表しているものである。

したがって、キャリア教育では、常に児童の側に立ち、寄り添い、児童の気持ちや考えを尊重し、それを汲み取った教育活動を心掛けることが必要である。

具体的な教育活動の基本的な評価とその改善の視点を以下に例示する。

教育活動の改善の視点（例）

- ① 児童は積極的に取り組んでいるか、理解はどうか
- ② 期待した変化や効果の兆しはあるか
 - ・活動中の児童の態度の変化
 - ・目標の達成状況（実施過程中、および終了時）
 - ・特に顕著な児童の行動・態度、課題など
- ③ 目標の設定は具体的で妥当であったか

なお、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」(p.10参照)を基礎的・汎用的能力との共通性に注目しながら、児童がどのような能力・態度をどの程度身に付けているか等について点検したり、評価したりする際の一つの参考として、活用することも考えられる。しかし、本来この枠組み（例）は、4つの能力を観点として児童の発達を見ていく見取り図として作成されたことに留意しておく必要がある。したがって、現在行われている各学校の一つ一つの活動が、どのような能力・態度の育成を目指したものなのかを明確にしたり、全体としてバランスのとれた取組となっているか、どの能力・態度の育成にかかわる取組が不足しているのか等について、点検・見直しを行ったりする際の参考として活用することが望まれる。

(2) 教育活動の改善の方法

教師が児童の学習状況の評価を踏まえて教育活動を改善するに当たっては、まず、教師自らが日常の授業の反省的な態度により、日々の授業を振り返り、授業をとらえなおすことをその基本としたい。その場合、例えば授業の目標が明確であるか、指導の内容が児童の発達の段階に合っているか、学習指導の方法が児童の実態からみて適切であるか、学習の形態が効果的に組み合わせられているか、問題解決や体験的な活動として充実しているか、外部人材や地域・文化の活用が学習指導に効果的かなど、実際に行っている教育活動がキャリア教育において児童に育成したい能力や態度等が適切に位置付けられていることをチェックする視点をもつことが重要である。

また、児童のポートフォリオや自己評価・相互評価などを基にして、教師の学習指導の基になっている児童理解や児童の実態把握、学習過程における児童の活動の深まり方や意欲などについて、授業での具体的な教師の学習指導の実践場面を検討することも考えられる。

なお、キャリア教育における教育活動の改善を行うに当たっては、先に述べたように、よりよく児童をはぐくもうとするあたたかい児童理解と、それを基にした児童の学習活動を意味付ける深く丁寧な見取りを常に心掛けることは重要である。また、このあたたかい児童理解と丁寧な見

取りについては、キャリア教育で学習指導をした教師相互に、あるいは学習指導に協力してくれた地域の人々などとともに語り合うことも、教育活動の改善には極めて重要である。

4 各学校の指導計画の評価と改善

(1) 指導計画の評価と改善の視点

各学校においては、キャリア教育の目標の達成を目指した指導計画が、効果的な働きをしているのかを適切に評価し、その改善を図ることが必要である。

キャリア教育における指導計画を見直し、その改善を検討するに当たっては、次のような点に留意する必要がある。

- ・ キャリア教育の目指す目標が、具体的で明確であること
- ・ 目標が各学校や児童の実態に応じて、実行可能な内容であること
- ・ 教員がキャリア教育の意義と実践への計画、方法等を十分理解できていること
- ・ 教育活動の実行に際し、児童にどのような変化や効果が期待されるか等が、具体的に示されていること
- ・ 評価方法等が適切に示されていること
- ・ 教員が、評価の目的、方法等について理解し、適切に評価できる能力を有すること
- ・ キャリア教育の推進体制が確立されていることなど

(2) 指導計画の改善の方法

具体的な改善の方法としては、年間指導計画の中に改善に向けた検討の時期を適切に位置付け、できるだけ客観的かつ多面的な検討を行うことが重要である。

例えば、単元実施の終了時に児童の学習状況と指導計画について振り返り、計画と授業の実際との相違点を記録として残したり、単元での児童の自己評価やポートフォリオにおける特徴的なエピソードをまとめたり、さらに、児童や保護者、地域の人々にアンケート調査を実施したりするなど、学期末や学年末のみならず、平素から各単元の具体的な改善に生きるような工夫を行わなければならない。

なお、キャリア教育を進めていくためには、各学校が創意工夫を凝らして、実践していくことが大切であるが、その際、自校の取組や校内研修の在り方等について「チェックシート」を作成し点検していくことも大切である。その一例として、次ページの「チェックシート（例）」を参考とされたい。

学校におけるキャリア教育推進チェックシート（例）

観点	評価項目	チェック
教育活動	自校のキャリア教育の目標の具現化を図る全体計画が作成されている。	
	育成したい能力・態度が各学年ごとに明らかな年間指導計画が作成されている。	
	各教科等における指導も含めて、キャリア教育を自校における教育活動全体で行っている。	
	児童の問題解決的な活動や体験的な活動の時間が十分に確保されている。	
	自ら課題が見出せない児童に対して、教師が課題の例を示したり、複数の課題の中から選択させたりする等の適切な支援を行っている。	
	課題の追究方法を児童が理解できるように見通しや振り返り、交流を行っている。	
	学習のまとめの段階で、学習の成果を発信できるまとめ方や発信の方法を工夫させている。	
	評価計画をつくり、各段階で効果的に評価し、指導等の改善を行っている。	
教育条件整備	保護者や地域の協力機関とのネットワークづくりができています。	
	教職員全体が自校のキャリア教育のねらいや内容について共通理解している。	
	学習のねらいや児童の実態等の視点を明確にして、社会人講師や地域の人材との事前の打ち合わせを行っている。	
	キャリア教育を推進する上で必要な施設・設備や予算措置が十分である。	
	校内にキャリア教育推進委員会等を設置し、定期的に話し合いが行われている。	
	キャリア教育に関する校内研修を計画し・実施している。	
	キャリア教育の実践の計画・実施・評価に関して、校内や学年内で積極的な話し合いが行われている。	
	評価結果に基づき、指導等の改善を図っている。	